

ずらは、もう止めてくれないか。そのかわり、自分達もお前達にいたずらするのは、止めよう。」

と、いいました。

ひょうすんぼの大將は、自分達が、いたずらしたのをあやまると共に、川の中から、細長い大きい石を、引きあげてきていいました。

「では、この石が腐って、なくなるまで、人様には、いたずらしないように、しましょう。」
と、いいました。

村人は、大変よろこんで、早速その石を村の氏神様の若宮様にはこび、若宮さまとともに、お祭りしました。

それから後、木の瀬河原の川では、水の事故にあったり、怪我したりすることは、一度もありません。

又村の人々も、その石が腐ることがないように、今も若宮神社のお宮の脇において、お祭りしています。

大宮神社と大寺惣右衛門

鳴野 黒 水 渉

ました。

大宮神社は、持田より海岸に至る、日豊本線の、踏切

はじめは、矢野与惣右衛門といっていました、大寺地区の名をとって、大寺の姓を名乗るようになりました。

りの所から、南の方へ二百米余りの所

与惣右衛門が亡くなると、藩公は、“大宮

の松林の中にあります。そのすぐそ

大明神”の神号を、与えられました。

ばに、与惣右衛門の、神霊碑が、並

筆者が、幼ない頃聞いた話ですが、ある日

んで建てられています。これは日

のこと、与惣右衛門が浜に出て、波打ちぎわ

豊本線開通の時、現在の所に、移
転されたのです。

に立ち、沖の方に向って、柏手を打たれると
目の前の海水が、泡立ちはじめ、見る間に海

祭神大寺与惣右衛門は、碑文

が真二つに割れて、道が開かれ、与惣右衛門

(欠けて不明の点が多い) によ

は、その海中の道を歩いて行き、再び帰って

りますと、大変神を敬う心が強く、

来なかったと、いうことです。

比木神社に、千日参りをしながら、

又、別の記録をみますと、

一日一本の、松や杉の木を、参道に

与惣右衛門は、横筏の堤家の先祖で、まれ

植えたといわれています。

に見る敬神家だったそうです。高鍋独得の大

又、秋月藩主の御用船の、船長をつと

神事を始めた人でもあります。神事の、祭文

めたり、金針を使って、病気の治療をす

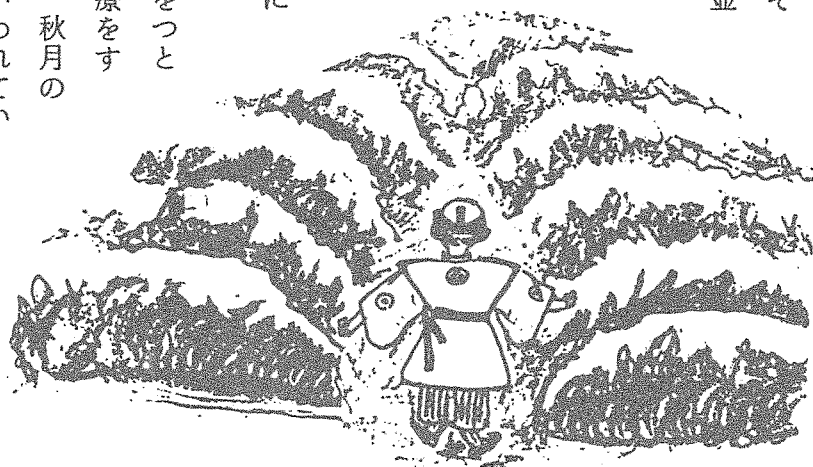
の中に、必らず大寺与惣右衛門の名が出てく

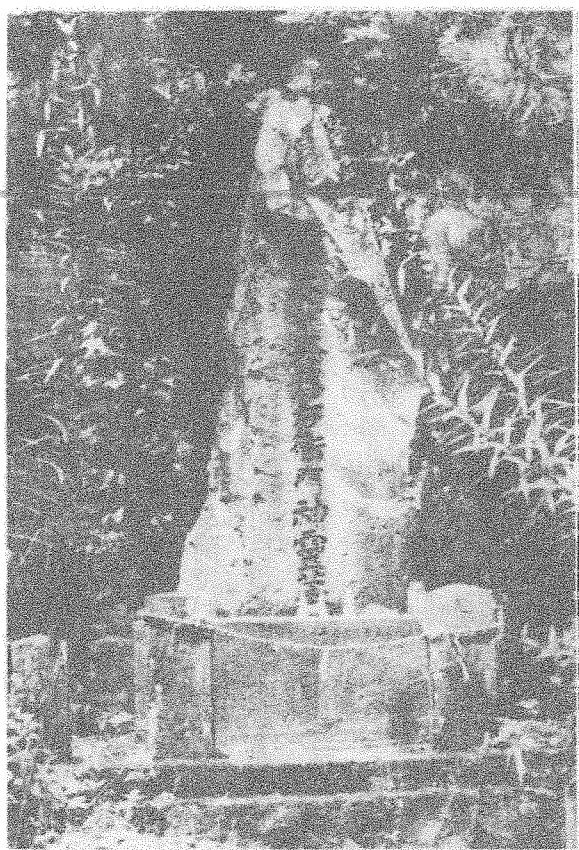
るなどその上、大変徳の高い人で、秋月の

るのは、このためです。

殿様の信任が極めて高かったと、いわれている

与惣右衛門は、どんな事でも神通力があり





奇怪な事が、度々起こるので、取り調べのために、藩の役人をさし向け、捕えようとしたが、前夜すでに邸から、姿が消えていました。

それから七日目の事です。鳴野の浜に突然、大きい石が、打ち上げられたのです。鳴野の人々は、この石こそ与惣右衛門の化身に違いないと、その石を基として、浜の近くに、お墓を建てたのでした。

順礼堂権現（熊野権現）の物語

道具小路 萱嶋 秀 樹

三百年余りも前のことです。ある冬の寒い日のことでした。一人の年老いた順礼が、門の前で、行き倒れになっていました。家の主人は、大変可哀想に思い、早速家に上げて、手厚く、看病してあげました。しかし病は重くなるばかりでした。旅の順礼は、最早これまでと、思ったのでしよう。

「大変お世話になりましたが、私は二度と、元気になることは、出来ません。もし私がこのまゝ、死ぬようなことがありましたら、私が背負って参りました、権現様を、どうぞよろしく願います。」

と、頼みました。そのあと間もなく、息をひきとってしまいました。

家の人達は、この可哀そうな順礼を、畑の北の隅（今の権現様の境内の北側畑の中央）に手厚く葬り、権現様は、家敷の中に、ていねいにお祭りしたのでした。

それから、何年かの月日がたちました。

ある年の秋、この家では屋根のふきかえ準備のために萱（ススキ・チガヤ等）を、屋敷の中に、山の様に積み上げていきました。その日も大勢で盛んに萱を屋敷内に運びこんでいました。

その中に、急に風が吹きだし、だんだんと強くなってきました。家の人も手伝いの人々も、

「こんな日に火事でん出すと、でじなこつど」

と、いって、たがい、戒め合っていました。ところが丁度その時でした。遠く西の方で、心配していた火の手が上がってしまいました。

強い風が吹きまくり、火は見る見るうちに全村に広がり、大変な火事になってしまいました。萱を運んでいた手伝いの人々は、慌てゝ萱を放り出し、それぞれの家に帰ってしまいました。山と積んだ萱のまん中で、家の者はもう、気が気ではありませんが、どうすることも出来ません。

そのうちに、この家の南どなりの庄野家が焼けはじめましたが、不思議にも今まで吹いていた南風は、急に西風にかわりました。

東側が焼ける時も
北どなりが焼ける
時も、私の家はど
うしたもののか、風
上の方になって、
山ほど積まれた萱
の束は、一束も焼
けなかったのです。

家の人達は、不
思議なこともある
ものだ、首をひ
ねるのでした。

この大火事で、
焼けなかったのは
わずかに三軒だっ
たので、焼け出さ
れた人々の、家を
建てなおすのに、
この萱が使われ、



大変役立ったということですよ。

また、萱が一筋も焼けなかったのは、順礼が背負
ってきた、熊野権現のおかげだと、人々の評判にな
ってしまいました。

その後、熊野権現は、村の鎮守の社として、祭ら
れるようになり、やしろも「じゅんど」（順礼堂）
と呼ばれる様になったということです。

このお話は、萱嶋家に代々語り継がれてきたお話
です。

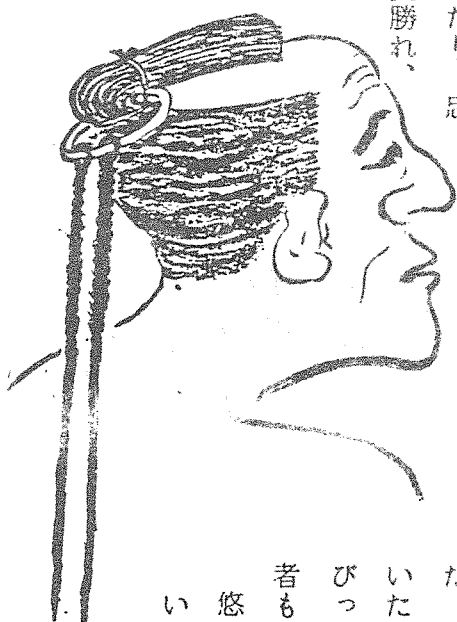
山名熊四郎重広のこと

山名家四代目当主の、山名重房の弟熊四郎は、幼ない頃から、武術が好きでした。特に柔道が、得意でした。若いころ江戸へ出て修業を重ね、宝山流の免許皆伝をうけて、郷里の高鍋に帰ってきました。

このことが、藩公（秋月の殿様）に認められて、新しい土地十五万石を賜わり、住居を“脇”に与えられ、藩公の守護役として、秋月家に名を連ねました。又、殿様の指図で、泥谷家より嫁をとりました。

勤をはげみました。武術が大変勝れ、人望も高かったのですが、藩士の中には、それをねたみ、心よく思わぬ者もいました。

その中に熊四郎を、亡き者にしよう、たくらむ連中が集まり、彼を殺すくわだてをし



ある夜、本家（横筏）から、夜も更けるころに、夜露を踏みながら、脇の自宅に帰る途中の出来事です。大手から宮田裏の大濠ばたの松並木のところまで来たとき、松の木の上に隠れていたくせ者が、さっと飛びおりるやいきなり熊四郎に切りつけてきました。

大刀は、熊四郎の首のあたりに、切りつけられました。その切りおろした大刀が、火花を散らして「カチーン」と、音をたてゝはねかえりました。

四郎は、一步飛びさがり、攻撃の体勢に構えて忽ち
に飛びかかり、敵を投げとばし、生け捕りにしまし
た。敵のかぶりものをとってみますと、驚
いたことに藩内の若侍です。熊四郎は大変
びっくりしましたが、まわりにいた数名の
者も呼びよせ、こんこんとさとした上で、
悠然として、わが家に向かって、去って
いきました。

このことがあってから、熊四郎の名は、益々高くなり、藩内の若侍を中

心に、若い者達が教えを乞うようになり、柔道に熱中し、
武術が益々盛んになったということです。

後でわかったことですが、熊四郎は、本家から帰る時
いろりの火箸を借り、まげのところに下げて、防具に使っ
ていたのです。

この問題の火箸は、その後藩の稽古場に、保存されて
あったといひます。

筆者、山名勝重が十二才の頃、祖母に勧められて、脇
の山名敬助宅に通い、柔道のけい古に熱中していたが、
当時のけい古場は、家の前の坪ん外（庭）に、古い畳を
敷いたものだったが、その広さは十畳程であった。

尚熊四郎は、敬助老人の曾祖父に当り

その当時は、失明しておられた。

（急性緑内障だったと聞く）

怪力・力士名貫川

後小路 小 椋 キミヨ

力士名貫川は、川南町尾花で、姓は宮越名は浅吉、あだ名を、牛翁といいました。

牛翁と呼んだのは、その怪力が、牛のようにあったからでした。その体格と

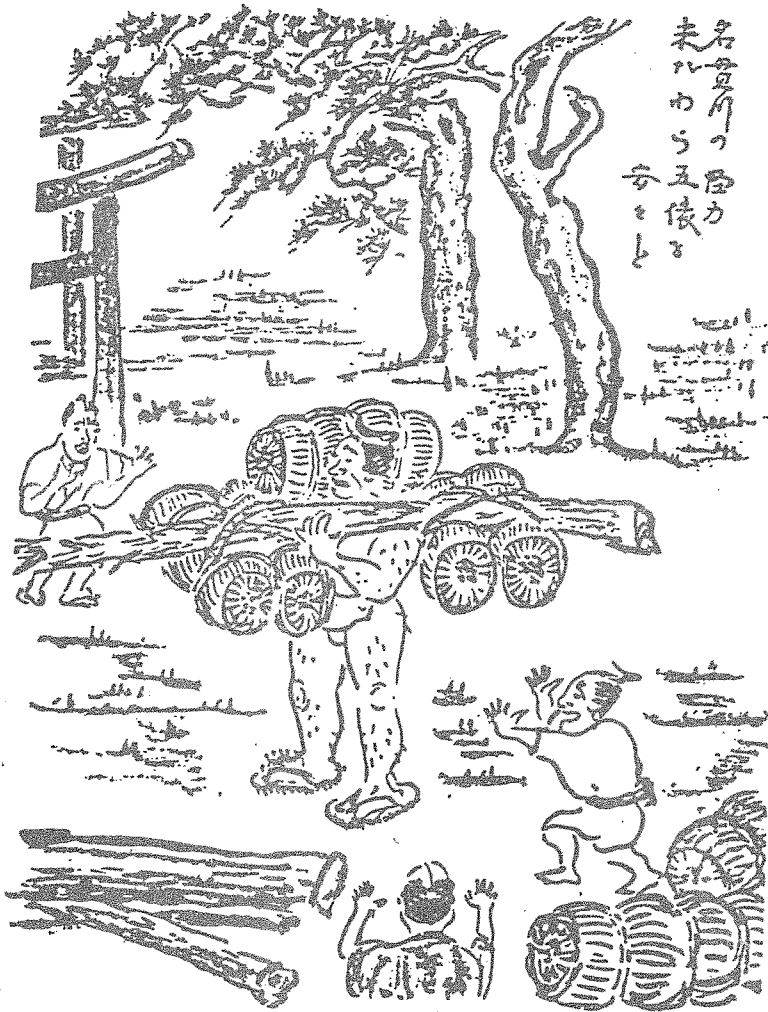
いったら、すごいもので、ふつうの大人が、見

見上る程で、ふつうの人の三倍はありました。

その証拠には、天保銭十枚を、手の平に並べても、尚、余る程でした。

た。

田畑を耕すのに、牛馬では手ぬるいと、自分がかわって、田畑を耕したなどと、いわれていました。



“すもう”が大変得意で、勝れた技ももっていて、高鍋界わいでは、彼の右に出る者は、なかったということです。しかし、“大男総身に知恵がまわりかね”で、へまをすることも、度々ありました。

ある秋の日
のことです。

萩原の稻荷神社の松林で、

村人達が、秋

の収かくの米

俵づくりをし

ていました。

と、そこを通

りかゝった牛

翁を見かけた

村人達が、呼

びとめ、冷や

かし半分に、

いいました。

「この米俵五俵を、一度にかつぐなら、こゝにある米俵は、みんなお前さんにやるが、どうだかついでみるか」と、いったところ、牛翁はその場で承知しました。

早速準備にとりかかりましたが、大きな丸太棒を、どこからか見つけてきて、米俵を前と後に、二俵ずつ四俵くくりつけ、一俵も右肩に背負い、やすやすと、五俵の米俵を、かつぎ上げてしまいました。村人達は、びっくり仰天しながら、平あやまりに謝まり、村人一人ひとりが、天保銭一枚ずつ出して、無事にすませました。

又ある時、第十一代秋月種殷公の、行列が通りかかった時、行列の前で牛が暴れて、行列が止まってしまいました。一同で静めにかゝりましたが、なかなか取りおさえることができず困っていますと、そこへ牛翁が通りかかり、それを見るなり暴れる牛を押えつけ、四本の肢を両手でつかみ、グッと肩にかつぎ上げ、無事に藩主をお通しさせたのでした。

これを、ご覧になった藩主は、大変お気に入りになり、早速力士として、抱え上げになり、活躍させられました。ある時のことです。某大名のかゝえ力士（横綱格）と

取り組むことになりました。ところが、ふつうなら先方に勝をゆずり花をもたせるのが、ならわしになっていたのですが、名貫川は

その加減がわからず力まかせに、相手を投げ飛ばしてしまいま

した。

その

ため相手の

力士は、肋骨と

手を折ってしまい、

大変不名誉な敗北だったのです。

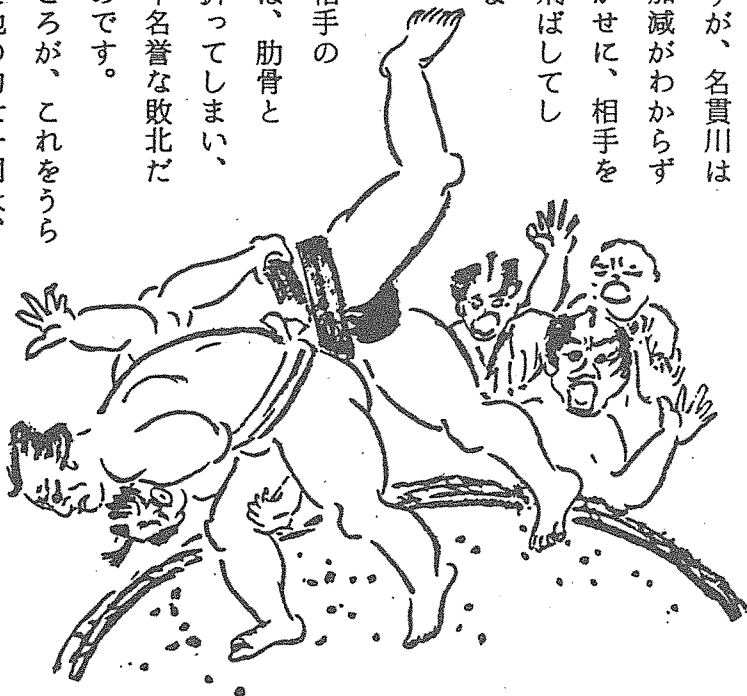
ところが、これをうら

らんだ他の力士一同は、

名貫川を夜の宴に招き、毒を盛ったというのです。幸わ

い頑健な体の持主でしたので、命だけは取り止めました。

その後は、体の調子がさっぱり出ず、仕方なく、高鍋に



帰ってきました。

しかし、高鍋に帰って来ても、本調子にならず、何の働きもできず、毎日ぶらぶらと、遊び暮していました。

殿様からは、幾分かの扶持をもらっていましたが、末路のことはわかりません。もし順調に進んでいれば、雷



電為衛門をしのぐ力士になっていたのではないかと、いわれています。

この名貫川の記念碑は、今も切原神社の境内に建っています。（大正八年三月建立）